ニッポン臨終図巻

ドクター和の

不死鳥の音楽人生

⑱ 平尾昌晃

『愛は不死鳥』という歌手の布施明さんの1970年のヒット曲を覚えていますか。この歌、本当は平尾昌晃さんが歌うはずでした。

1958年に歌手デビューした平尾さんは「和製プレスリー」と呼ばれ、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いでしたが、デビューから10年後に肺結核を患い、長野県岡谷市のサナトリウムに入院します。

戦後の混乱期、肺結核は死に直結する病気で年間10万人もが死亡していました。1950年ごろ、ストレプトマイシンという薬が開発され、不治から治る病に変わりましたが、平尾さんが発病したころは2年程度の治療入院が必要とされ、「胸郭成形術」といって肋骨を6本切除し、片肺を押し潰して病巣を消滅させるという今では信じられないような手荒い手術が行われていました。肺結核からの生還には、それほど決死の覚悟が必要だったのです。

平尾さんはこれらの治療を経て復活。当然、肺機能は半分以下に低下していますから歌手としては致命的で、音楽界から消え去ってもおかしくないはずでした。

しかし、平尾さんはこの長い入院生活で、社会福祉の心と作曲の才能を開花させたのです。

「看護師さんや医師、患者さん、見舞いに来てくれた人…。あの時、助けられた体験はお金に換えられない」と、チャリティーゴルフや、福祉音楽イベントを立ち上げます。

復活を祝い、作詞家の川内康範さんがプレゼントした詞が『愛は不死鳥』でした。平尾さんは自ら曲をつけましたが、歌うことはできず「俺の代わりに」と布施さんにこの曲を託したのです。

その後は作曲家として『よこはま・たそがれ』や『瀬戸の花嫁』、自ら再びマイクを持ったデュエットの金字塔『カナダからの手紙』など、出す曲どれもが大ヒット。「ベッドで安静にしていると、天井の節穴が楽譜のオタマジャクシに見えてきた」と本人が語るように、病の経験があったからこそ、これらの名曲が生まれたようです。

もちろん、肺結核の後遺症とは生涯付き合わねばなりませんでした。2014年には原発性肺高血圧症による肺炎で危篤状態に陥るも復活。その翌年、肺がんが発覚するも体力を考慮し手術は行いませんでした。その後はどこに行くにも呼吸補助器持参で、精力的に仕事をこなしていたようです。

今年7月13日、体調不良を訴えて東京都内の病院に入院。21日に急変し、帰らぬ人となりました。79歳。死因は肺炎。肺結核から50年あまり、まさに不死鳥のような音楽人生でした。

ちなみに平尾さんは3年前、岡谷市にできた看護学校に校歌を提供しています。『未来に向かって』というタイトルです。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。